

夜泣き貝

元内和弘

厳島神社、広島にある花こう岩から成る島にある祭祀施設だ。ある日、神社と干潮になれば現れる鳥居に繋がる石畳の傍に誰かが大きな岩を幾つか置く。満潮になろうとも天辺が沈まないその岩の上には、夜泣き貝一匹が干からびていた。水の傍で干からびている理由を説明できる貝はいない。

「いつからか岩ができたな」

一匹の夜泣き貝は大きな石に興味を持った。岩は波に流されず、その上に居れば如何なる魚も自分を狙う事叶わなかった為である。

「よし、もつと安全になれるなら、多少の努力は仕方ない」

表面にくっついて岩の上に登った。たった数分で安全な場所を得て、それは大きな安心感を得る。

「良い風だ」

潮騒は心地よく、波打つ海は立ち止まっているだけでも水と小さな食事を運んでくれた。その場は予想以上に楽な場所だという事に気づく。

「しかし人間が多いな。暗くなっているのに。一体あんな小さな箱を手に、何に熱中しているんだか」

それには人間が理解できなかった。目の前にはエメラルドの海があり、雲一点ない空は不安すらもかき消してくれる。

「なのに、見ているのは少ない。皆小さな箱ばかりに目を奪われている。人間は本当に理解できない」

それはしばらくの間、その場で時間を過ぎた。そうしている内に海の底が気になりだす。

「今頃何をやっているんだろうな」

岩の上から水面下を覗けば、様々な生物が動き回っていた。しかしその目を引いたのは躍動的な動きをする微生物よりも悠々自適に佇む魚である。

「凄く大きな魚だな」

魚はとても遅い泳ぎでも小さな魚達を餌にしていた。その姿を余りにも自由で横暴と感ずる。が、とても羨ましく思った。「私ももつと良い物を食べたいな」

海が運んでくれた微生物は十分だったけ

れど、魚に比べて味がしなかった。

「何だか物足りない」

魚と微物を比べると海底に沈むあらゆる物が目に入る。どれも大きく、美味しく、きつと素晴らしいのだ。

「少し待つか。もしかすると波が運んでくれるかも知れない」

微物を運ぶのだから、小さな魚も運んでくれそうだった。それは海を信じて疑わない。そうして数時間を、ただ大きな魚を観察しながら過ごす。

「変だな。魚が岩の上が上がってこない。何故だ？」

それは悩んだ。悩む事でまた時間を過ぎず。

「そうか波が弱いんだ。きつとそうだ。波が弱いのでは丁度良い魚が流されないのも当然だ。今はまだ時じゃない」

微物を頼張りながらそれは時を待つ。そうして待っていると日は沈み、いつの間にか岩底にはもつと多くの魚が表れた。

「なんて事だ。この海にはこんなにも多くの、大きな魚達がいたのか」

それが思い出したのは、水面下での出来事だった。

「底にいた時食われそうになった事があったな。いつも何故魚があんなに多かったのか気になっていたが、夜になると増えるのか」

それはしばらく魚達を見る。その内に少しばかり水面下に残っているであろう己の同胞に同情した。

「可哀そうに。私はこんなにも安全に暮らせているのにな。だがいざ仕方ない事だ」それは万物の理に対して確固たる考えがある。

弱肉強食。

弱き微物は食されるのみという考えだ。故にそれは微物を食す事にも同情を抱いたりほしくない。

「この岩の事を教えてあげたいな。でも、ダメだダメだ！」

水が届かない岩の天辺は手狭だった。もし多くの貝がこちらに集まれば、自分の居場所すら無くなりかねない。それはそう思ったのである。

「しかし本当に多いな魚達。羨ましいな。私ももつと魚が食べたいのに。ん？」

目の端に止まったのは、自分と同じ貝が流れる微物を取る為に必死になって追いかける姿だった。岩から見れば微物はそこから中にあるのに、底にいる貝はひたすら前ばかり進んでいる。

「微物を取る為に何を必死になっているんだろうな」

底の貝はしかも、微物を追いかけてもつと深い海の方に進んでいた。そこにはもつと大きな魚があり、下手すれば殻ごと噛み砕かれるかも知れない。

「おい危ないぞお前！」

しかし岩の上で幾ら叫ぼうと警告は届かなかつた。仕方なく、それは水面に頭を突っ込む。

「魚達が見ているかも知れないからな。おい、お前！そこは危ないぞ！」

しかし幾ら呼んでも底の貝は聞かずに遠くへ行ってしまった。危険で深い方へと「可哀そうに。岩の上が上がってこれば心配ないのに」

「本当か？」

「誰だ！」

ため息をつきたい気分のまま呆然としてみると、もう一匹の夜泣き貝が岩の底から登ってきた。

「本当にそこは危なくないのか？」

「認めたくはないが、正直それは若干の安堵を覚える。それは「寂しさを減らしてくれる仲間に出会えたから」だと考えたが、実は自分と同じく岩に上がってくる存在がいるという安堵からだった。

「そうだ。ここは安全だ。魚もいない」

「そうか！ よかった。下は危な過ぎる」

「微物だけが、ここには食べ物もあるぞ」

「本当だ！ ここは楽園か！」

「かも知れない」

「こんな場所に何時から来れたんだ？」

「私はずっといたよ。日が沈むその前から」

「凄い！ 慧眼を持っているな」

「いやいや、それよりこっちに來い。微物が揃っているぞ」

「本当だ。ありがとう！」

もう一匹は嬉しそうに微物を取る。二匹

は多くを語り、今までにいた危なかった出来事や夜泣き貝としての武勇談を語った。

親密にはなったが、関係は長続きしない。

「それでな。私は」

「ちよつと待て！」

「な、なんだいきなり」

「何かに気を取られたもう一匹は素早く岩の向こう側に向かった。そしてそのまま少しの間、岩の影から出てこない時間が経つ。」

「どうしたんだお前。一体そこに何があるんだ？」

「べ、別に」

「別にとはなんだ」

「別に何もないぞ？ だから来るな」

不安感が襲ってきた。それにはもう一匹の行動に心当たりがあったのである。

「まさかお前！！！」

岩の影に向かうとそこにはもう一匹が、流されてきた小さな魚を食していた。それはずっと自分が待ち望んでいた機会だったのである。

「ふざけるなよお前！」

「な、なんだ！」

「それは私の魚だぞ」

「何を言っているんだ。見つけたのは俺だ」

「私はお前なんかより長くこの岩にいたのだぞ！ その魚は私が先に食べるべきだろうが！ 常識しろ！」

「俺は常識がないからお前が何を言っているのか分からないな。だがお前が俺の魚を奪おうとしているのは分かった」

「奪う？」

それは全身の血が沸騰する程に怒っていた。もう一匹の行動が無作法で無礼でプライドのない行いに思えたからである。

「元々俺が待っていた魚だと言っている！」

「聞いちゃいられないな。魚も食べたし、俺は岩から降りる。微物には飽きたからな」

「逃げるのか泥棒が」

「そうだ。逃げるから付いて来るな」

「誰が付いていくか。いつか魚はまた来る。今回は奪われたが次はそうはいかないぞ！」

もう一匹は振り向かず岩の上に構えた。それは茫然と残された小さな魚の残骸をじっと見つめる。

「だ、誰も見ていないし」

もう一匹が完全に消えた事を確認して暫く、それは残骸についつい目を奪われた。残骸とは言えそれは小さな魚で、骨についた身は微物とは比べ物にならない。

「ちよ、ちよっただけなら！」

微物に飽きたそれは長い間悩んだ結果、残骸に近づいた。

「ああ！ そ、そんな」

しかし目の前で残骸は波に流されて何処かへと沈んでいく。水面の下に目をやると大きな魚が通り過ぎながら残骸を潰し、下には他の貝達が迷いなく残骸を食した。「プライドもないのか。海の底で潰れた残骸を待っただけなんて」

海底の貝に野次を飛ばす。その行いはその気持を晴らす事は出来なかったが、自分が海底の存在より優位にいるというプライドを保たせる事ができた。

「とにかく待ってれば小さな魚くらい

は来るといっものは分かった。後は根気勝負だぞ」

微物には目もやらず、一秒一分一時間を待ち続ける。それには確信があった。いずれ必ず愚かで小さな魚が岩に頭をぶつけに来る時が必ず来るといふ。

「待つんだ」

岩の上で待っている間、まるで自分が大きな魚にでもなれた気がした。

「狩るために待つんだ」

悠々自適に岩の上でじっとしているだけでも小さな魚を食えるのだから。

「必ず来る獲物を狩るために待つんだ」

わざわざ微物の為に海の向こうへ消えてしまうような、そのような存在達には成りたくないのだ。

「悠々自適に！ まるで大きな魚達のように！ この場所を守りながら必ず来る獲物を狩る為に待つんだ！」

一日が経っていつの間にか潮騒は波と共に海を引かせる。大きな魚すらも、かの流れに敵わず皆鳥居を過ぎて遠くへと向かった。しかし一匹の夜泣き貝だけは、未

だ岩の上で再び来る獲物を待ち続ける。干からびたままに、時を待ち続ける。